

目を覚まし、廊下を歩いていくと、キッチンから明かりが漏れていた。

覗くと、ツバメがお湯をマグカップに注いでいるようだった。

「ルル？」

私に気づいたツバメは、安堵^{あんど}したように顔を緩^{ゆる}ませた。

「具合、どう？」

「平気よ」

「……よかった。あ、紅茶、飲む？」

「ええ、お願い」

彼は、マグカップを私の前にそっと置いた。

そして、向かいに座ると、沈黙が流れる。

紅茶の香りが鼻先をくすぐる中、ツバメは一度だけ、細い息を吐く。

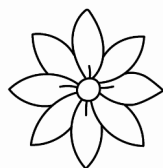
「話さなくちゃいけないことがあるんだ」

彼の指先が、ぎゅっと組まれている。

「俺は、君に嘘^{うそ}をついていた」

「どういう、こと？」

「リーファの薬のために、ここへ来たんだ」





「……そう、わかったわ」

風が窓を揺らす。
その音がやけに耳に残って。
ツバメの話を聞いた私は。
私は――。

